



流木チップ舗装材の敷きならし、敷き固め作業風景

# 電 北 流木チップを試験舗装

芦別ダム  
敷地内で

## 不二建設が施工

【岩見沢】北海道電力はこのほど、同社が所有・管理する芦別ダム敷地内で、不二建設（本店・滝川、中山健三社長）の協力を得て、流木チップを活用した試験舗装を実施した。ダムに流れ込んだ、厄介者の流木を有効活用する試み。北電では利用拡大を目指し、耐久性や経年変化の調査、さら

なる品質の改良に取り組んでおり、今後長期にわたり試験舗装した品質のデータ収集に努め、有用性の可能性について検証を進める。毎年、融雪水や台風に伴う大雨などによって、流木は山地から河川を伝い、全道各地の北電が所有する水力発電ダムへ流れ着く。放

つておくと取水口を詰まらせる原因になるため、北電ではやむなくクラムシエルを使って取り除いている。ダムから引き上げた流木のほんの一部は、炭にした

り、要望があればカーデニングを趣味にしている人に提供しているが、ほかに有効な使い道がなく、大半は法律に基づき、適正に廃棄しているのが現状。このため北電では処理に掛かる労力や経費に頭を痛めている。流木活用の一環として北電では、すでに堆肥化への研究に着手しているが、今回新たに芦別ダムへ流れ着いた流木で、チップ舗装の実用化テストにも取り組んだ。

流木をチップにする作業は、流木チップパーと呼ばれる機械で長さ5センチ以下、厚さ1センチ以下に加工。チップ舗装材は、加工したチップを主に粗骨材や細骨材、硬化材、乳剤、顔料を混ぜ合わせて仕上げる。

素材に流木を使ったチップ舗装は、施工を担当した不二建設も初めての取り組み。実用化を目指し、さまざまな研究と苦勞を重ね、今回は歩行者向けとして歩行性や、耐久性などを高める材料の配合に努めた。また透水性、すべり抵抗性、クッション性、安定性にも配慮した。

芦別ダム敷地内でのチップ舗装は、ダム建設中に殉職した人の慰霊碑前と、空知川水系の守り神を祭った「水天宮」の前面、さらに車1台分の駐車スペースを対象に実施。全体施工面積は70平方メートルで、使用したチップ舗装材は36立方メートル（流木だけでは15立方メートル）に上った。

施工手順はまず、厚さ10センチの路盤を造成した後、その上層にチップ舗装を施し、さらに表面を保護し、耐久性を持たせるためにトップコートを行った。また、チップ舗装の周囲は土の上に直接、流木チップによるマルチング（厚さ10～20センチ程度）をした。

施工に要した経費は約50万円。不二建設の佐京賢一技術マネジメント部長は「流木を使ったチップ舗装材は、アスファルト舗装に比べると割高になるが、通常の木材を使った舗装材に対し、同程度の価格で済む」と説明。

工事を発注した北電旭川水力センター芦別土木課の榎原教仁課長は「芦別ダムだけでも年間600～700立方メートルの流木が流れ着く。この試験で流木がチップ舗装材として十分実用になることが証明できれば、大いに活用したい」と期待している。